平成25年度 第3回放課後子どもプラン検討協議会議事録

- 1 日 時 平成26年3月19日（水） 午後6時30分～8時23分
- 2 場 所 府中市役所北庁舎3階 第1会議室
- 3 出席者 府中市放課後子どもプラン検討協議会委員（近藤克浩、渡辺たき子、佐藤政利、佐藤明、川村英史、玉木英夫、田代恵一、渡邊桂子、澁谷智、英太郎）10名
事務局（子ども家庭部児童青少年課 桑田課長補佐、放課後児童係阿部係長、菊池事務職員）3名
計13名
傍聴者 1名

4 内容

(1) あいさつ

（会長）

皆様こんばんは。明日は府中市内の中学校の卒業式、25日は小学校の卒業式が予定されており、今年度も残りわずかとなっております。本協議会も第3回目となり、本日も重要な議題がありますので、ご協力よろしくお願いたします。

(2) 配布資料の確認

事務局より、配布資料の確認及び資料の訂正の説明を行う。

(3) 傍聴について

事務局より傍聴の申し出があることを説明し、委員の了承を得る。
傍聴者入場。

(4) 議題

ア 子ども・子育て支援新制度の進捗状況について
（事務局）

本市における子ども・子育て審議会の状況でございますが、前回の協議会の後、第5回審議会が2月7日（月）に開催されました。内容としましては、昨年12月に実施した「子ども・子育てに関する市民意向調査」の速報値が報告されたことが主なものでございます。

来週開催される第6回の審議会では、この調査結果を分析し、本市におけるニーズ量の見込みを算出し、報告される予定でございます。

なお、今後の予定としまして、27年度からの新制度実施に向けて、条例等の整備をしております。学童クラブにおきましても、運営基準についての国の省令が示される予定になっており、市の運営基準を策定しております。

また、新制度にあわせた保育支援を推進するため、26年度より子ども家庭部の組織が再編され、保育課が「保育支援課」に名称変更し、「支援計画係」と「認定給付係」を新設します。

イ 平成26年度学童クラブ・放課後子ども教室の変更点等について (事務局)

学童クラブにつきましては、今年度と変更なく実施いたします。

放課後子ども教室についてですが、資料1をご覧ください。

前回の本協議会におきまして、全ての児童が健全に育成されるよう対策を行い、現状の1～3年生について、学童クラブと放課後子ども教室を連携・拡充していくということで、皆様のご了解をいただきました。提示した事務局案の中で、資料1に記載してある3点につきまして、内容を変更して実施していく予定です。

まず、新1年生の参加開始時期ですが、従来、学校の生活に慣れてもらう主旨で、5月の連休明けからの参加としていましたが、新1年生の4月の時期も安全な居場所を確保してほしいというご意見を多数いただきまして、1年生の給食の始まる4月15日から受け入れを開始していく予定です。

学校休校日の実施についてですが、今年度は土曜日と午前中を年間39日程度不定期に開催をいたしましたが、実際の参加状況等を考慮させていただいて、平成26年度につきましては、土曜日の運営は廃止とし、その分夏休みを拡充して実施をしていく予定です。具体的には、お盆期間を除いた平日の20日間程度、午前・午後1日通して実施をする予定です。

昼食の扱いについてですが、従来、学校休校日の日に午前・午後1日通して参加する場合は、一度帰宅をして昼食をとってから、午後参加するという形をとっておりました。しかし、学校から自宅までが遠く、往復の間が危険であったり、また、家庭の事情でどうしても自宅でお昼ご飯が食べられなかったりという児童が実際の現場にもいたということがあったため、原則は、一度帰宅して昼食をとることとしますが、どうしても難しい場合のみ、夏季休業期間に限り事前に届出をしていただいて、昼食の持込みを認める予定です。

以上の3点につきまして、平成26年度から内容を変更して実施してまいります。

また、今年度委託をしております放課後子ども教室の受託団体については、平成26年度もそれぞれ同じ団体に委託をして事業を実施していく予定です。

(委員)

委託団体について、市の基準を満たしている団体に委託することとなっていると思いますが、年度ごとに実施内容をチェックするということは行っているのですか。

(事務局)

日々の運営状況を事務局が巡回してチェックをしています。今年度につきましては、1校あたり4～5回巡回して委託した内容を実施しているか確認をしております。

また、今年度の運営状況及び来年度の事業提案などについて、各団体とヒアリングを行い、結果が良好であったため、来年度も引き続き同じ団体に委託をしていく予定です。

(委員)

新1年生を4月15日から受け入れ開始していくことと、夏休みを平日20日間実施することで、予算が変わったりしているのでしょうか。

(事務局)

新1年生の受け入れについては、2年生以上の受け入れを4月7日から行いますので、教室の開催日数が増えるということではありません。例年よりも参加者が多く見込まれるため、スタッフを増員する予定ですが、22校の間で参加児童数に応じたスタッフ数の増減があったため、全校的に見ると予算の大きな変更はありません。

また、学校休校日の実施につきましては、今年度は半日実施のイベントを39日間実施していたため、この分を夏休みに充填している形になりますので、特に予算の大幅な変更はありません。

(会長)

昼食の扱いについて、どうしても難しい場合のみ昼食の持込みを認めるということですが、どのような基準で判断する予定でしょうか。特別な理由があれば認めるということなのでしょうか。

(事務局)

現段階では、どうしても難しい場合という条件に特段の基準は設けない予定であります。ただし、夏の暑い時期の昼食の持込みとなるので、衛生面が一番心配であるため、保冷パックに入れて持ってきてもらうなど保護者に協力をしてもらえるとという確認が取れた人のみ受け入れをしていきたいと考えております。

ウ 放課後子ども教室と学童クラブの連携方策について

(事務局)

こちらの議題についてですが、前回の会議において説明しましたとおり、今回の会議から来年度の協議会にかけて、合計5回に分けて行う予定です。

前回の会議におきまして、放課後子どもプランの現状、課題、事務局案としての対策ということで説明をさせていただきました。全体の考え方として、すべての子どもが健全に育成されることを目的として、学童クラブと放課後子ども教室の制度を連携し拡充していくということで、委員の皆様のご了承をいただきました。

今回の会議におきましては、放課後子どもプランの課題の3つのうち、「学童クラブで6年生まで受け入れること」について、議論をしていただきたいと考えております。

資料2をご覧ください。まず、議論に入ってください前に、前回の会議において出た主な質問や意見の紹介をさせていただきます。

まず、国の運営基準についてのご質問がありましたので、内容が確認できたものについて説明します。

1つ目として、「学童クラブで6年生を受け入れることがどれくらいの制限なのか」についてご質問がありました。厚生労働省に確認しましたところ、「平成24年8月の児童福祉法の改正により、学童クラブの対象は6年生までとなったため、運営基準上の対象者も6年生までとなる。ただし、自治体によって、優先順位を設けることは可能なため、1～3年生を優先して利用させることは問題ない。」ということをございました。

2つ目として、「運営基準を満たさず満たさないによって補助金の金額が変わることはあるのか」というご質問がございました。こちらについても、厚生労働省に確認しましたところ、「運営基準を満たさないことによって、国の補助金が受けられなくなるということはないが、6年生まで受け入れている場合と、受け入れていない場合とで補助金額に差がつく可能性がある。」ということをございました。こちらについては、まだ明確なものはないということをございました。

続いて、検討の方向性についてですが、前回の会議において、いただいた様々なご意見のうち、放課後子ども教室と学童クラブの連携方策を考えるうえで、必要と思われる考え方を掲載させていただきました。具体的に申し上げますと、「学校施設の活用も視野に入れる必要もある。」、「放課後子ども教室を有効利用しながら、学童クラブの負担を減らしていく。」、「放課後子ども教室実行委員会とも絡めて検討する。」、「現在の運営方式について検討する。」、「予算を考慮すると、予算が確保できるまで一定の議論しかできない。」というご意見をいただいております。

また、「その他」としまして、「指導員（スタッフ）の質に差が出ないように一定の基準を設ける必要がある。」、「学童クラブが学校に隣接しているところと、道路を挟んで設置している所を考慮して検討する必要がある。」というご意見もいただいております。「その他」の内容につきましては、次回以降の会議で検討を行っていきたいと考えています。以上が、前回の会議で出た主な意見でございます。

続いて、資料3をご覧ください。

前回の会議においても、「学童クラブは保護者や児童の生活に直面しているため、放課後子ども教室と比べて必要性が大きい」というご意見もいただいております。学童クラブと放課後子ども教室の連携方策を考えるにあたり、「新制度での学童クラブの4～6年生までの受入れるということ」が最大の課題ということで考えております。本日はこの課題を中心として検討を進めていただければと思います。

「学童クラブで6年生までの受入れに対するニーズ」についてですが、まず前回の会議で資料の提出依頼がありました、学童クラブと放課後子ども教室の児童の学年別の内訳についてご説明いたします。

資料4をご覧ください。学童クラブの入会児童数につきましては、平成25年12月1日現在、1年生686名、2年生530名、3年生422名、合計1,638名。小学校の在籍児童数に対する入会率は、1年生30.3%、2年生25.7%、3年生19.6%、1～3年生全体で25.3%となっております。学年が高くなるにつれ、入会率は減少している傾向でございます。

続いて、こちらも資料の提出依頼がありましたが、前回配布した「学童クラブアンケート結果」の中で、「4年生以降も学童クラブを利用したい人数」の数値が1～3年生の合計の数値となっていたところ、学年ごとの数値が見たいとのご要望をいただいております。

資料5をご覧ください。こちらは、4～6年生の受け入れに関する資料ということで、前回お配りした学童クラブ利用者アンケート結果の数値を

利用して、4～6年生のニーズについて、記載させていただいている資料でございます。

表1は学童クラブアンケートの回答者の内訳、表2は「学童クラブを4～6年生も利用したいと答えた人」で、「ほぼ毎日利用したい」と答えた人数の内訳、表3は「アンケート回答者」のうち、「学童クラブを4～6年生も利用したいと回答した人」の割合となっております。学年が上がるにつれ、学童を希望する児童の割合が減っている状況となっております。

表4は平成25年4月の学童クラブ在籍児童数の内訳で、学童クラブで在籍児童が一番多い時期の4月の数値を使用させていただいております。

表5は現在の学童クラブ利用者のうち、どれくらいの人数が4～6年生もほぼ毎日利用したいと考えているかの予測人数です。表3で算出した「4～6年生までの学童クラブの利用希望率」を「表4の4月1日の在籍児童数」に乗じて算出したものです。1年生が226人、2年生が166人、3年生が133人となっております。

表6は入会予測人数となっております、青色の欄の1～3年生は、表4の平成25年4月現在の在籍児童数をそのまま記載しております。オレンジ色の欄の4～6年生につきましては、表5の予測人数から抜粋しておりますが、3年生の人数が一番現実のニーズに近いと考えられることから、3年生の予測人数を4～6年生の予測人数と仮にさせていただきました。

表7は表6で算出した入会予測人数が、現状の学童クラブの施設の面積で入会可能かどうかを示したものです。

青色の欄についてですが、各学童クラブの育成室面積を国の運営基準である1人あたり1.65平方メートルで割り、各学童クラブの定員を算出しております。この定員に対しまして、1～3年生の入会者数として4月現在の数値と比較し、空き状況を算出し、4～6年生を受け入れられるかどうかを示しております。現状の1～3年生の時点で、まだ4～6年生を受け入れられる箇所は、受入可否の欄に○をつけ、全部で13箇所となっております。反対に、赤字で人数が書いてある箇所は、現状で既に定員を超えており、4～6年生を受け入れることができない箇所、合計9箇所となっております。

オレンジ色の欄は、先ほど算出した4～6年生の入会予測人数を現状の入会者数に加算した場合、受け入れられるかを示しております。空き状況について、4年生の人数を加算した場合、受け入れることができる箇所は全部で12箇所、4・5年生の人数を加算した場合、受け入れられる箇所は11箇所、4～6年生の人数を加算した場合、受け入れられる箇所は10箇所となっております。

また、矢崎学童クラブや新町学童クラブのように、希望者全員を受け入

れた後の余裕定員が2人ないし3人というところでは、平成25年度の入会人数では受け入れることができるが、1～3年生の希望者が増えた場合は、4～6年生のうち利用できない児童が出てしまい、年度によって利用できる年と利用できない年が出てしまう可能性があります。また、表7では、今後の人口増加や児童の体格差などは考慮に入れておりませんので、実際は、もう少し厳しい状況になるかと考えております。

続いて、資料3の2ページ目をご覧ください。学童クラブで6年生まで受け入れることのメリット・デメリットを挙げております。メリットについては、学童クラブ利用者アンケートの自由記入から、デメリットについては、学童クラブ指導員からの意見の聞き取りにより挙げさせていただいたものです。

以上を踏まえまして、本日議論していただきたいのは次の2点になります。

1つ目として、4～6年生の受け入れ方法について、放課後子ども教室で受け入れるのか、学童クラブで受け入れるのか、それ以外の方法で受け入れていくのかについて、ご協議いただければと思います。

2つ目として、受け入れ方法に関してどのような課題があるかについて、ご協議いただければと思います。

資料3の3ページ目をご覧ください。事務局案としましては、学童クラブの対象者は6年生までとしますが、学童クラブでは1～3年生を優先して受け入れ、4年生以降は放課後子ども教室で受け入れていくという方法ができればと考えております。ただし、従来どおり、障害をお持ちのお子さんについては、4年生以降も学童クラブで受け入れていくという形で行えればと考えております。

続いて、受け入れ方法に対する課題についてですが、事務局案の場合、放課後子ども教室で4～6年生を受け入れたいと考えておりますので、高学年の参加が少ない放課後子ども教室で、高学年の知識欲や好奇心に応えられるような高学年向けのプログラムを実施し、高学年の参加を促すことができれば、と考えております。

参考資料としまして、学童クラブ利用者アンケートの結果から、「放課後子ども教室を利用していない理由」、「学童クラブの内容で必要なものについて」、「学童クラブに預けている理由」を付けさせていただきましたので、参考としてご覧いただければと思います。説明は以上になります。宜しくご審議のほど、お願いいたします。

(会長)

事務局より、本日議論していただきたい点が2つあるということで説明がありました。1つ目として、4～6年生をどのように受け入れていくのかについて、放課後子ども教室で受け入れるのか、学童クラブで受け入れるのか、それ以外の方法として何かあるのか、2つ目として、受け入れ方法に関してどのような課題があるのか、でございました。

事務局案として提示されているのは、学童クラブの対象者は6年生までとするが、1～3年生を優先的に受け入れ、4年生以降は放課後子ども教室で対応するということとございました。そして、4年生以降を放課後子ども教室で受け入れることとなった場合に出てくる課題として、現在の放課後子ども教室では、高学年の参加が少ないため、高学年が興味を引くようなプログラムを実施していくということでした。

まずは、4～6年生の受け入れ方法について、皆様からご意見をいただければと思います。よろしくをお願いします。

また、資料5の表1の4小のアンケート回答者数の数値が違うと思いますので、確認をお願いします。

(副会長)

資料4について、放課後子ども教室に登録している児童が学年があがるにつれ大幅に減り、特に5、6年生になるとほとんどの児童が登録をしていないのですが、なぜ登録をしないのでしょうか。個人的には参加する必要がなくなっているのかなと思います。同じ傾向が学童クラブでも見られます。こうした比率で4年生以上の学童クラブの在籍数を予測していくと、少し違った数値が出てくるのではないのでしょうか。そうなった場合、4年生くらいまでは預けたいという保護者は4分の1程度いるのかなと思いますが、その後は大幅に入会率は落ちていくのではないのでしょうか。

また、資料5の表7で、現状の1～3年生を受け入れている状況で9箇所4～6年生を受け入れられない、6年生までの人数を考慮すると12箇所が6年生までを受け入れられないということですが、さほど変わりがないのではということが正直なところです。例えば、4～6年生になったら他の空いている学童クラブに行くという方法はできないのでしょうか。

(会長)

資料5は、あくまでアンケート結果から予測した数値です。たしかに保護者からすると、自分の子どもが小学生低学年や第1子である場合は、4年生以上も預けたいと思う人も多いと思いますが、いざ子どもが4年生に

なったときは、子ども達も外で遊びに行きたくなる部分も出てくると思いますので、4～6年生も利用したいという人数は、もう少し減ってくるのかなと思います。

(事務局)

表6の4～6年生の部分については、あくまで3年生時点での希望人数の数値を使用しておりますので、4年生になったときはもう少し低い数値、5・6年生になったときはさらに低い数値になるのではないかと考えております。

資料5につきましては、あくまでアンケート結果から出た条件で見るとい資料でございます。副会長のおっしゃったような条件で人数を算出してみることももちろん可能です。

4～6年生が空きのある学童クラブに行くことについてですが、現状としても、在籍する小学校の学童クラブ行かなければならないという条件はございませんので、希望する空いている学童クラブがあれば可能と考えております。ただ、難点として、4年生になると授業終了時間も遅くなり、午後3時40分くらいであるため、その時間から他の学童クラブに移動するという事は少し難しいのかなと思います。

(委員)

今回の資料は数値的なものだけなので、あまり参考にはならないと思っています。「ほぼ毎日利用したい」と回答した人の人数が出ていますが、親は学童クラブに毎日行かせたいと思っけていても、実際子どもはそうではない場合が多いのではないかと思います。また、5・6年生になれば、習い事や塾に行くようになり、結局学童クラブには毎日行かないという人も出てくるので、資料5の数値を見ても、あまり議論の対象にはならないと思っています。

表7で各学童クラブの面積と定員が示され、既に定員を超えている学童クラブが示されていますが、現状として、待機児童はいるということなのでしょう。また、他学区の学童クラブに通っているという場合もあるのでしょうか。自分としては、学童クラブの児童が夜歩いて帰ってきている場面を見かけますが、冬は真っ暗な通学路になっているので、他学区の学童クラブから帰ってくるというのは、安全な面でどうなのかなと思います。

(事務局)

現状では府中市の学童クラブでは待機児童はありません。今回の資料の中で定員という表記をさせていただいておりますが、現在、国のガイドラインで1人あたりの面積が1.65平方メートル以上が望ましいとされています。あくまでもガイドラインですので、これを守らないというものではないため、府中市では、全員入所を優先しており、定員を超えているところは、一人あたりの面積が少なくなっています。

平成27年度からは面積基準を各自治体で定めることとなっており、国が示している基準が1人あたり1.65平方メートル以上となっておりますので、それに従って今回資料のなかで算出しております。ただ、国の基準も概ねの基準となっており、1人あたり1.65平方メートル以上確保しないといけないわけではありませんが、従来のガイドラインよりは、拘束力が強くなってきてしまいます。その場合、現在定員を超えて入所している子ども達に関してもどのように対応していくかが課題となります。

なお、資料5については、現在の入会児童数で算出をしていますが、実際に学童クラブに参加する児童は、入会児童数の7割程度となっています。国においても、1人あたり1.65平方メートルというものを、入会している人数で判断するのか、実際に参加している人数で判断するのかについて今後の課題となっています。

また、希望している児童で、他学区の学童クラブに通っている児童はいますが、定員を超えていることを理由に市からお願いして他学区の学童クラブに通っているという児童はいません。障害のある児童で、希望する学童クラブでは人数的に難しい場合のみ、他学童クラブに入所してもらう方が数名おります。

(会長)

1人あたりの面積を入会児童数で見ると、参加児童数で見るとについては、万が一、入会している児童が全員来てしまうことを考えると、非常に難しい問題だと思います。

また、現実問題として、1年生と6年生が現在の学童クラブの施設で一緒に生活するという事は、難しいと思います。1年生と3年生の体格差も結構あるので、非常に厳しいのではないのでしょうか。事務局案で、放課後子ども教室で4年生以上を受け入れていくという説明がありましたが、現時点ではこれが一番妥当かなと思います。皆様いかがでしょうか。

(委員)

見守りボランティアをしていますが、子どもと会話していくなかで、3年生は下の兄弟のお迎えに行くなど、自分で色々やっていたらいけないと思っている子どもも多いようです。4年生になったら学童クラブはいらないと決めている家庭も多いのではないのでしょうか。

(会長)

たしかに親の思いと、子どもが4年生になったときの子どもの思いは違うものはあるかもしれません。

(委員)

塾や習い事に通っている子どもも多く、子どもによっては、一週間毎日習い事をしている子どももいます。1年生の間は、学童クラブに通っていますが、2年生以上になると、友達が習い事をやっているから、自分もやってみるといような場合もあり、学童クラブに行っても早帰りする子どももいます。

(会長)

委員に聞きたいのですが、放課後子ども教室として特別教室を使用している学校もあると思いますが、学校も施設的に厳しいなかで、どのように感じていますか。

(委員)

学校によっては、空き教室が全くない学校もあるため、今放課後子ども教室で使用している教室しか空き教室がない学校がほとんどで、もう1教室増やすのはなかなか難しいと思います。ただ、登録していても実際放課後子ども教室に来る子どもは少ないので、多少増えても問題ないのではないかと思います。

(会長)

たしかに、資料3の高学年を受け入れたときのデメリットを見ると、新たに施設を確保する必要があるということもあり、現状は厳しいと思います。委員から、高学年が塾のような色々な体験ができるものを取り入れるというような案が出たとおり、4～6年生は放課後子ども教室に行くようにしたほうが自然なのかなと思ってしまいます。学童クラブで4～6年生までを受け入れていくことは難しいと思います。

(副会長)

学童クラブの施設を大きくすれば良いという問題ではなく、時代によってマンションが立って児童数が一時的に増えたが、現在は児童数が少なくなっている箇所もあります。

1つの案なのですが、現在学童クラブはブロック制となっているので、各ブロックで1箇所、文化センターのようなところで、4～6年生が来ることができる学童クラブの要素のあるものを作っていくことも必要なのかもしれません。1年生と6年生の体格差を考えると、高学年専用の学童クラブを作って受け入れていくことも検討する余地があるのではないのでしょうか。ただ、自転車に乗って良い悪い等の新たな問題も出てくるとは思います。

(会長)

昔は学童クラブは文化センターの中にありましたね。

(委員)

新町学童クラブができる前は、新町文化センターの中に学童クラブがあり、新町小学校と府中第六小学校の子どもが来ていました。

(委員)

児童館で行っていた学童クラブをやめて、現在小学校に隣接した形で行っているという経緯がございます。

(委員)

文化センターには高齢者が多く、子どもが多くてうるさいという意見が当時はありました。ただ、現在は文化センターにも子どもはたくさん来ていると思います。

(委員)

学校がある以上、学校の施設内で子ども達に何かしてあげたいとの思いは変わりません。学校の空き教室がないなか、担任の先生との兼ね合いや児童の私物があるため、普通教室を使用することは難しいかもしれません。4年生以降になると登録人数が減ってくるということは、放課後子ども教室に関しても、プログラムが低学年向けのものが多いということではないのでしょうか。学童クラブについても、学童クラブの施設内で遊ぶというのは、やはり低学年になってしまい、高学年は外で遊びたいという思いが強

くなっているのではないのでしょうか。塾や習い事の関係もあると思いますが、そういうニーズは、学童クラブと放課後子ども教室の枠というよりも、子ども達の居場所づくりとして、習い事や補習のようなものを学校施設内でやってあげて、4～6年生の受け皿を作っておくというのではないかなと思います。特に、自治会や地域の方も参加してくれていますので、お囃子などを子ども達に見せるような形でも良いのかなと思います。学校施設をもっと有効利用して、子ども達の受け皿を作っていくといいと思います。先ほど、文化センターの利用の話もありましたが、学校と文化センターが近いところについては、うまく活用して、地域の人と一緒に子ども達のために居場所をつくるということも良いことだと思います。ただ、若松小学校は近くに文化センターがないので、そういうところは、学校を活用するしかないと思います。また、学童クラブも新小金井街道をはさんでいるので、その危険性も考えると、学校内に子ども達をとどめておくという方向で、議論を進めていければと考えております。4～6年生の受け皿を作ることで、学童クラブの負担を軽減していければなと思います。

(事務局)

補足説明ですが、アンケート調査に答えた保護者の背景として、通勤時間が1時間以上かかっているという保護者が非常に多くありました。そうした保護者の中では、子どもの安全面を一番心配しているというような記述がたくさんありました。大人の目のあるところで安全に過ごしてほしいということが保護者の願いのようで、自分の目の届かないところでどのように過ごしているかと、安全面について不安に思っておられるようです。

(会長)

地域によっては、子どもが帰る時間に地域の方々が見守りをしてきている箇所も市内には多くあります。学童クラブは午後5時に集団下校、午後6時までに保護者のお迎えということになっていますが、それに間に合わない保護者もたくさんいるのも事実で、午後8時頃まで子どもが一人で家にいるという家庭も少なくないと聞いています。大人の目の届くところで、できるだけ子ども達を見てあげたいと思いますし、そのようなことを放課後子ども教室でできればと思います。また、いろんな地域があるので、すぐにそのようなことができない現実もあるのかなと思います。

来年度からコミュニティ・スクールの府中版が始まり、現在各校で準備を進めている段階で、日新小学校と府中第五中学校では既にモデル校として実施をしております。色々な会議に自分もですが、会議に参加する人

は大体同じであることもあり、コミュニティ・スクールの中で、放課後の子どもの居場所づくりについて、話ができないかなと思っています。子どもは同じ子どもなので、大人同士も連携が必要なのかなと思います。

(委員)

今放課後子ども教室では、6年生まで登録できますが、実際の登録は少ないという状況です。学年があがるにつれ、一人で遊べるようになります。大きな動きをする高学年が、放課後子ども教室に来るとなると、やはり危険を伴うと思います。

コミュニティ・スクール関連ですと、まだ話が具体的には進んでいない中ですが、他校では地域の方が華道教室を行っているところもあり、習い事にいかなくても、学校の中で体験できるという取り組みを行っているところがあります。このような地域の方が講師になっているという形式であれば、取り組んでいくことはできるのかなと思います。

(会長)

まだ先の話になると思いますが、地域の方と連携している学校はすでにたくさんあるので、コミュニティ・スクールの中で地域の方に放課後子ども教室に協力してもらえないかという話はできるのではないかと思います。保護者が子どもの居場所を必要とした場合、どこかにその居場所を作っていく必要がありますので、学童クラブでは受け入れられない場合、放課後子ども教室で受け入れて、高学年が行きたくなるようなプログラムがあればいいのかなと思います。

(副会長)

4～6年生は学童クラブではなく、放課後子ども教室を勧めて登録してもらえるような形にするのか、学童クラブで一旦受け入れてから、放課後子ども教室に参加してもらおう形にするのか、事務局ではどのように考えていますか。後者の場合では、指導員の配置の仕方、出欠の管理、責任の所在等についてが明確にならないと厳しいのではないのでしょうか。

(委員)

そのあたりについて、委員の皆様にご協議いただきたいと思っています。本日の会議では、4～6年生の受け入れについて、学童クラブでは受け入れることが難しい状況が明らかになってきたと思います。国として受け入れてもらいたいというところをどこで対応していくのか、4～6年生につ

いては障害児まで受け入れているので、まずはそこを優先順位として受け入れていくことはできるかと思います。受け入れ方法について、本協議会の中で大枠が決まれば、4～6年生の受け入れについて、障害児以外の具体的な話に進めていけると考えています。

ただし、すでに空き教室がほとんどない学校もあり、必ずしも放課後子ども教室が安全な受け皿になるとは限らないのが現状です。第三の受け皿等も視野に置いて、ぜひご意見をいただければと思います。

(事務局)

そもそも、学童クラブで6年生まで受け入れることになった背景についてですが、従来、子どもは10歳前後までに、大人のいない場面で自分の遊びや生活面も含めて管理ができるようになり、大人の管理下よりも、子供同士の場面で遊びや活動が求められるように自立が進むとされていたため、10歳前後までが学童クラブの対象となっていました。しかし近年、子ども達の遊びや生活面での自立の遅れが見られるようになってきているということ、また、高学年の遊び場や生活支援の場が整っておらず、高学年の安全安心な居場所が学童クラブ以外にないということが背景にあり、児童福祉法が改正になったとされています。ただし、自立が遅れているから学童クラブで受け入れていくということではなく、施設や事業が多様に用意されていることも重要視され、自立を促すような施策も併せて必要であるとされています。

(会長)

本当に行き詰っているということがお分かりいただけたと思います。学校の施設は空き教室が少ないということが府中市の特徴で、学童クラブの施設も一杯であるという状況にあります。学校の子どもは、学校の中で見守っていけるように形を作っていく必要があると考えています。それに対して、地域の人達がどう関わっていけるかを考えていくことになるのかなと感じています。

第3の受け皿として、生涯学習センターは指定管理者になっていることもあり難しく、また、文化センター等も今後同様の形態になることも考えられますので、学校の中を基本に考えていくことが必要かと思います。

(委員)

今後話合う内容について、この会議のなかで、学校内で子ども達の居場所を作ることによって学童クラブの負担を減らしていく方法で話を進めて

いくということになれば、今度は具体的にどのように受け入れていくかの話をしていくようになるのかなと思います。学習や補習を放課後子ども教室の中で行うことが可能なのか、また、お囃子やフラダンスなどの教室を行うことが可能なのかなどについて話合うことになると思っています。また、他自治体では、決まった曜日にミサガ教室を保護者が行っている事例もあります。府中市ではそういった事例はありませんので、世田谷区や品川区など他自治体の事例も資料として出してもらい、メリットやデメリットを比較しつつ話ができればいいのではないのでしょうか。早めに話を進めていく必要があると思います。

(会長)

全校で同じ話にはできないと思いますので、最終的には、各学校の放課後子ども教室実行委員会のなかで協議しながら、具体的な話をしていくことでもいいのかなと思います。今回色々お話いただいたので、基本的な方向性は見えてきたかなと思います。

(副会長)

保護者が安心して安全に子どもを預けられることが一番大事で、そのようなニーズを学童クラブ以外で満たせ、学童クラブの人数が減り、学童クラブの環境が良くなったり、新たに施設を建てる必要がなくなったりということであれば良いと思います。ただし、1～3年生や障害児については、周りの危険から守っていくということが絶対に必要で、周りから何かあったときに防御してあげなければならない年代だと思います。ある意味、4～6年生にもそういう必要がある場合が出てきたなかでの児童福祉法の改正だと思いますので、その中で受け入れなければいけないとされる方々は学童クラブで守っていくという仕組みを考えながら、ある程度自立できる子どもたちについては、早く一人立ちできるシステムをより安全で大人の目の届くところで行うことができれば、良い結果になるのではないのでしょうか。

(事務局)

子ども・子育て支援新制度のニーズ調査で、まもなく学童クラブのニーズ量がでてまいります。先ほどご指摘がありましたが、今回の資料はあくまで学童クラブを利用している人のニーズであり、実際に国に報告するのは、就学前の保護者を対象にしたニーズ調査の結果に基づいた数値ですので、その数値に従って、学童クラブの受け皿について考えていかなければなりません。今後ニーズ調査の数値もお伝えしていく予定です。

今回、色々お話いただきましたが、学童クラブでは1～3年生を受け入れ、4～6年生は放課後子ども教室で受け入れる、という結論にはまだなっておりませんので、色々な方向性を探りながらの資料をまた次回以降提示し、話を進めていければと思います。

(会長)

最後に、事務局から事務連絡をお願いします。

(事務局)

今年度の協議会はこちらで最後でございます、本協議会の委員の任期は1年ということになっておりますが、議論の内容が平成26年度まで継続するものですので、できましたら、平成26年度も引き続き今年度委員の皆様にご協力をいただければと考えております。団体さんによってご事情があるかとは思いますが、よろしく願いいたします。手続きについては、また4月以降に推薦の依頼をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

また、平成26年度の第1回目の日程についてですが、平成26年5月28日(水)午後6時30分より開催させていただきますので、よろしく願いいたします。平成26年度に委員になられた方々に正式に通知をさせていただきます。

(会長)

長時間に渡り、本日は本当にありがとうございました。それでは、最後に閉会のあいさつを副会長をお願いします。

(副会長)

本日色々な資料を見ながら、分からなかった所が除々に見えてきたのかなと思います。次回以降、少しずつ具体的な話に入っていけるかなという中で、問題点等を議論していければと思いますので、よろしく願いします。本日はどうもありがとうございました。